

Sarah Peebles' "108"

サラ・ピーブルズの”108 - 東京音歩き”と題されたこのアルバムは、東京の中のいくつかの街の音を記録したものであるが、このアルバムを聴くと、単なるフィールド・レコーディングではないことが分かる。20世紀から21世紀に移る歴史の節目の時に出会った音風景であり、また地球のある一地域であるアジアのなかの東京という場が発信している音風景を、作曲家であり日本の古典音楽を研究するために数年間滞在したサラ・ピーブルズの耳のフィルターを通して、東京の素顔をフィールド・レコーディングしたものである。

サラ・ピーブルズの耳には、普段の日常の音として無視されている街が発している様々な騒音を、見事に音曼陀羅として捕らえている。東京に暮らしている者には当たり前すぎて単にうるさい日常音としか思えないが、彼女のアーティストとしての耳は、世界の中の一都市である東京が発している現在の生きた音にフォーカスをさだめ、そして見事に東京の素顔を浮かび上がらせている。

東京の音をサウンド・エフェクト用にレコーディングしたものや、環境音と音楽とを組み合わせられたCDはいろいろあるが、東京の現在の素顔に取り組んでつくられたサウンドスケープによるCDは、これが始めてではないかと思われる。メガロポリスである東京という場が発しているコンテンポラリー・ノイズばかりでなく、その間に見え隠れする昔から伝えられ続けてきたヒストリカル・ノイズにも注意深く耳を傾けているのが特徴である。毎日東京で暮らしている者にとっても、このアルバムを聴いていると当たり前すぎて気にもとめなかった街の音に、改めて東京が発している音風景のダイナミズムに感動してしまう。世界のそれぞれの都市にはそれぞれの歴史や文化を内包しながら、今日の経済活動にともなう様々なアンビエント・ノイズに覆い隠されてしまい、どこも同じような無表情な状態になっている。サウンドスケープという視点から見ると、ノイズのなかに現れてくるアジアの日常音とも言えるサウンド・カオス（その場の磁場が発している振動）を読みとることが大切なのである。

初めて訪れた場所で感じる様々な感覚体験は、今まで暮らしていた場所とは異なる差異が感じられる瞬間であり、またすぐにその場所の環境に適應してしまうせいか記憶には留めにくい。カナダのトロントに在住しているサラ・ピーブルズの耳には、こうした差異を敏感に感じることで”108 - 東京音歩き”という新たなコンセプトに集約していった。

アジアに共通している音風景は、音による賑わいである。バザールの賑わいこそ、街が生き生きと成り立っている証である。バザールの賑わいは場所を変えて、人が大勢行き交う駅前や交差点、ショッピング・センターなどでも似たようなサウンド・カオスとなって現れている。これは世界中どここの街でも共通した音風景であるが、ヨーロッパ文化圏と比べるとアジア文化圏の音風景には騒がしさがその街らしさを現していることが分かる。ノイズとしての音の意味はなくなり、香りとして伝わってくる体臭のようなものとして、騒がしいと思われる街のノイズにも安らぎを感じてしまうのである。グローバル化されたデジタルの世界では均一化された情報しか伝わってこなくなってしまった。そこには五感で感じられる何か欠落している。だからこそ改めて耳から捕らえた初々しい音風景にこそ、その街の本当の素顔が見えてくるのである。

サラ・ピーブルズの耳が捕らえた東京のサウンドスケープについてアナライズしてみよう。初めに新宿の駅前の交差点で説教師が持っているスピーカーから流される独特のアナウンスがあたり一帯を覆いつくすので、この音声を聞くたびにいやな気分になる。彼女の録音を聴くと、この音声が次第に交差し始めデュオにもトリオにもカルテットにも重なりあってゆき、音の曼陀羅模様が変わっていくのがおもしろい。スティーブ・ライヒが1965年に制作し、ミニマル・ミュージックの始まりとなった〈It's gonna rain〉を思い出してしまう。サンフランシスコの路上で終末論をまくし立てる説教師の一節をループにして、モワレ状のミニマル・サウンドを生み出していくものだった。新宿の説教師の音声をサラ・ピーブルズは新たなサウンド・カオスとして捕らえながら、時間軸として音風景を際立たせている。サラ・ピーブルズが東京の音の特徴として強く感じていたのがこのサウンド・カオスであり、このアルバムの随所で見つけることが出来る。しかしあまりに自然に流れているので、ほとんど気が付かないくらいである。

新宿駅の入口で鳴らされている<ピーン・ポーン>という音は盲導鈴であり、券売機の音やプラットフォームで鳴らされる到着や発車を知らせるサイン音（各駅で異なるサイン音が使われている）が電車の走行音や車体音、さらに車内の音と共に方々から鳴り響き、ここでも壮大なサウンド・カオスとなっている。

さらにパチンコ屋が出すノイズは、東京ばかりでなく日本ならではの特徴のある音のひとつであろう。洪水のようにジャラジャラと流れ出る音は、ギャンブラーにとっては祝福のファンファーレであり、そうでない人にとっては粗大ゴミのように気が滅入ってしまう音なのだ。サラ・ピーブルズの録音からは東京ならではのサウンド・カオスとして浮かび上がらせて、まるで星くずをばらまいたような金属音による近未来的な音風景となって迫ってくる。

このアルバムのなかで最も静かで心を落ち着かせてくれるシーンがある。大晦日の夜の闇のなかから聞こえてくる除夜の鐘である。このアルバムのタイトルである“108”は、除夜の鐘が撞かれる回数である。仏教では人間は108のぼんのう煩悩を持っており、鐘を撞くことで煩悩が取り払われ、心が浄化されていく。

除夜の鐘は、新年を迎えるための行事として東京では江戸時代(1600~1868)から続けられている。街の方々から打ち鳴らされる鐘の音はまさに江戸時代の音風景がそのまま甦るひとときである。一年中騒音で明け暮れしていた東京の音風景が、最も静かになる時である。鐘の音が静寂さを引き出している。まさに日本の鐘は、静寂さを作するためのサウンド・インスタレーションであった。鐘の音を調べるとDを基音にBとEとが鳴っていることが解る。寺の梵鐘の始まりは黄鐘調(A)がスタンダードとされていたか、日本の雅楽の黄鐘(A)ではなく中国の音名の黄鐘(D)のほうがかっこよかったのであろう。日本の多くの鐘がD音を採用しているのを、ここでも聴くことができる。それにしても、このような心洗われるシーンが残されていること自体、東京に永らく暮らしていながら初めて耳にするシーンであった。鐘の音によって静寂さが現れてくるブラック・ホールの発想こそが、日本の伝統としてのサウンド・カオスなのである。

新年の初めに行われる剣道家の寒稽古は、日の出とともに練習試合が行われ、熱気のこもった竹刀のぶつかる激しい音が異常とも思えるサウンドとして響いてくる。蜜蜂の巣箱のなかで飛び交っている羽音のようでもある。

下町にあるアメ横商店街では、物売りの声が日本の芸能で使われてきた伝統的な発声法を受け継いでいて、今日でも聴くことができる。近くの走る高架電車の音や街のノイズと解け合ったアカペラのオペラを聴いているような、いかにもアジア的なバザールの音風景を醸し出している。

サラ・ピーブルズの耳に広がるサウンド・カオスは西洋文化圏の音風景と比較すると、どこかアンバランスな音風景であり、まさに東京が抱えている音風景そのものを的確に捕らえている。ここで言うアンバランスとは、騒音のなかに静寂を感じたり、静寂を感じるために音を出すといった慣習が日本の風土や文化のなかに根付いているからである。相対的な聴取の文化と呼んでみたい。相対的聴取に着目したアーティストにはサラ・ピーブルズばかりでなく、コンピュータ・ミュージックのカール・ストーンやクリストフ・シャルルをはじめとして多くの人たちがいる。

サラ・ピーブルズの耳が相対的聴取にむかった背景には、聴くことがそれぞれの音楽を創り出すことだとするジョン・ケージの美学から、地球の音環境の調律を試みたカナダの作曲家マリー・シェーファーが提唱するサウンドスケープの思想などがあったにちがいない。このアルバムには、街の音を聴くことの楽しさ、未知なる音に出合う興奮、歴史を感じさせている音への興味、意味が分からなくても音の魅力に誘われてしまうパイド・パイパー的な衝動が詰まっている。街が奏でているサウンドスケープの最もよきリスナーとしての耳の記録が、このアルバムとなっている。街の音は、リスナーたちによってますます磨かれていくのである。そうなることを期待して。

吉村 弘
Hiroshi Yoshimura